

---

# 臆病な僕

緋色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

臆病な僕

### 【Nコード】

N4547B

### 【作者名】

緋色

### 【あらすじ】

面倒臭がりな僕。いつも眠たげな僕。何も好きになれない僕。中途半端な僕。女の子になってしまった僕。僕は、臆病だった。中

## 第一話 過去の僕と過去の怪物

小さいとき。

自分の年齢の意味なんてわからずに、ただ指を折って歳を数えていた頃。

『幼稚園』という場所で他人の存在を初めて知った頃。

僕は いや、正確には僕たちなのだが 幼稚園のとある先生に、とある質問をされた。それはごく普通の質問でそれはごく平凡な質問でそれはごく当然の質問であつたけれど、僕にとってそれは奇妙で奇異で奇怪で不可思議なものだった。

まるで、太陽の昇つた空が暗く染まっているように。

夜空に上る月が一つではないように。

何かが可笑しく、何かが外れて、何かが違う。

そこで感じたのは途方もない疎外感。

そして隔絶たる違和感。

そんな言葉が相応しかつたように思う。

その先生の顔は、どんなに記憶の底を浚つても思い出すことができない。脳髄の奥底まで眼を凝らし、夢の世界で時を遡ろうとも、薄暗く塗りつぶされたようにしか見ることができないのだ。しかし、それも当然といえば当然。もう十年も前の話だ。克明に覚えていられるほうが異常。いや、それは言い過ぎだった。

ともかく、僕はその先生の顔を覚えていない。だけど、その先生の声だけはしっかりと覚えている。鈴がなるような声、というわけでもなく、凜と張つたような声、というわけでもない。ややソプラノ気味のアルト。きつと大学を出たばかりなのだろうと推測できるような、若いと感ぜられる声。女性特有であり、子供に語りかける

ような甘い口調。どこにでもありふれた声であり、けれど確実に区分できるその声。今でもきつと聞き分けることができると思う。

先生は　顔を黒く塗りつぶされた先生は、前かがみになって小さな僕とその目線を合わせる。やや掠れたピンクの唇を動かして、そこから言葉という音を紡ぎ出した。

そして『質問』を僕にする。

「樹ちゃんの好きな色はなんですか？」

僕は口を開かなかった。答えられなかったから。

先生はさらに続ける。

「樹ちゃんの好きな食べ物は何ですか？」

僕は首を傾げた。その音が意味することを理解できなかったから。先生はさらに続ける。

「樹ちゃんの好きな人は誰ですか？」

僕は眼をパチクリと瞬かせた。そこにいる人が僕とはまったく異質な『もの』なのだど気がついて。

先生は辛抱強くじつと答えを待ったが、ついには諦めたように腰を伸ばした。そして僕の隣にいる女の子に顔を向け、塗りつぶされた黒い顔で、それでも笑顔を作っていると予測させるように口角を持ち上げると、僕と同じ『質問』をその子にした。

「久美ちゃんの好きな色は何ですか？」

「あかつ！」

女の子は手を上げながら元気よく答えた。

その返事に顔の見えない先生は口角をさらに持ち上げる。

「久美ちゃんの好きな食べ物は何ですか？」

「エビフライ！」

女の子は手を上げながら元気よく答えた。

その返事に顔の見えない先生は口角をさらに持ち上げる。

「久美ちゃんノ好きナ人ハ誰デスカ？」

「パパとママ！」

女の子は手を上げながら元気よく答えた。

その返事に顔の見えない得体の知れない先生は口角をさらに持ち上げ、僕の方へと振り向いた。その顔はやはりわからない。やはり見ることは適わない。黒く塗りつぶされたように消されている。でもきつとその顔は笑顔で。

でも、きつと、僕はその顔を見て恐怖した。

理由なんてわからずに、理由なんて求めずに、理由なんて答えずに。ただただこれは怖いものだと理解した。

「樹ちゃんノ好きナ色は何デスカ？」

その怪物は口を開き、先ほどと同じ質問を繰り返す。気付けば、僕や隣の女の子と一緒に並んでいた子供たちはみんな、僕の方を見ている。隣の女の子も僕を見ていた。興味に輝かすその眼に邪悪な色などなかったが、しかし、けれど、だからこそ、僕はやはり恐怖した。

震えながら、しかし、涙を流すことはなく僕は、口を開く。

喉が渴いた。

何かこの喉を潤おすものが欲しかった。

何かこの場を潤おすものが欲しかった。

けれど、都合の良いものなどなく、都合の良いヒーローも現れることはない。観念したように、諦観するように、救いを求めて、僕は喉を震わせる。

「あか」

とだけ。

## 第一話 過去の僕と過去の怪物（後書き）

今連載しているのが終わっていないのに、違う作品を書き上げてしまいました……。

今回はコメディではなく、割とシリアスに、ほのぼのに、でもやっぱり少しコメディも入っていきます。すいません。わけがわかりません。でも、そういうものですので、読んでくださると嬉しいです。

## 第二話 僕と親友と日常風景

「樹！帰ろっぜ」

大きく叩かれた背中を発信源とし、僕はビクツと体を震わせた。そして停止。

このまま再び夢の世界へと羽ばたこうかとも思ったが、すぐにその考えは廃棄する。なぜなら、このまま寝ていたら絶対に碌なことにならないからだ。すでに経験がそれを物語っている。前に無視したら頭が大変なことになっていた。具体的に言えば、頭がワックスでモヒカンされていた。あんな出来事はもうゴメンである。

ということ、起きることにした。

うつ伏せていた顔を上げ、枕にしていた腕を解放し、ちよつとばかり机に垂れてしまった涎を隠しながら拭きつつ、現状確認。

見渡す、なんてことはしない。だって、面倒臭い。首を動かすのだってカロリーを消費するし、貴重なエネルギーも無駄にする。可能な限り省エネをモットウにしているのだ、僕は。

ボーッと眺めた視線の先にあるのは、白いチヨークで汚れてしまっている黒板。より視野を広めるなら帰り支度を始める生徒達と机と椅子と黒板とチヨークとエトセトラ。

つまりここは高校で、今帰りのホームルームが終わったということなのだろう。もちろん、僕の優秀なメモリーの中に帰りのホームルームを体験したというフロツピーは存在しないので、寝過ごしてしまったようだけど。最前列から三番目、窓際から二列目という、ある程度先生の視覚に入りつつも無視できないこともない座席位置のおかげで僕は最近寝っぱなしだ。

「・・・隼人。僕、いつから寝ていた？」

「弁当食って、五時間目が始まったときからずっと。サトちゃんず



つと恐い眼でお前を見てたぜ。まあ、涙目になりながらも授業は続けていたけど」

「……そっか」

うん。それは可哀相なことをした。明日にでもお詫びをしておこう。

依然に金一封と書いた封筒を謝罪しながらサトちゃんに渡してみたら、飛び跳ねるほどに（というか、椅子から転げ落ちたというのが正しいのだが）驚き、その後、目を見開いて金一封と僕を見比べながら動揺し、最後には諸手を挙げて単純に喜んでいて。実際、中には何もなく封筒だけだとわかると、半泣きでキレられたのだが。どうやら、その月末はピンチだったらしい。

そんなかなりどうでもいい部類に入る、担任とのささやかな出来事を思い出していると突然頭が前のめりに倒される。後頭部に軽い痺れと痛み。判断するに、どうやら僕は頭を叩かれたらしい。

ぐいつと頭を元の位置まで持ち上げる。

「……痛いじゃないか、隼人」

「勝手にトリップすんな。つか、お前反応遅すぎ。まだ寝ぼけて……ないか。いつものことだしな。まあ、いいや。さっさと帰り支度しろよ。置いてくぞ」

かなり失礼なことを言い放って隼人は上から見え下ろしてくる。上から見下ろされるのも、今僕が椅子に座っているのだから仕方がない、なんて言い訳はこいつには通用しない。何せ、こいつの身長は百八十センチを越えている。そして、僕の身長は百六十センチを越えている。この差はどうしようもない。

なんとなく世の中の理不尽を感じつつ、僕は立ち上がった。

「うん。じゃあ、帰ろうか」

「……何か覇気がないよな、お前。いや、気力が無いのか」

腕組みし、渋面でいきなりそんなことを言い出す隼人。「シヤキつとしろ」なんてどこぞのコマーシャルで聞いたことのあることを言ってくる。相手にするのも面倒なので、僕は適当に返事を返した。

「まあ、そんなとこ」

「しかも、授業中いつも寝ているくせにその眠そうな顔。毎夜遅くまで起きてんのかよ？」

「まあ、そんなとこ」

「工口本か？」

「まあ、そんなとこ」

「……………」

「……………」

「……………帰るか」

「そうしましょう」

隼人は呆れたため息を吐き、僕はただいつも通りの無表情で答えを返す。

そして僕と隼人はまだざわめきが残る教室を後にするのだった。

### 第三話 僕と親友と帰り道

夕暮れ。赤く染まる空。冬の木漏れ日。冷たい風。そよぐ木々。枯れた枝。

嫌な季節だ。だって寒い。

「隼人、寒い。何か僕に温かいものを奢るべきだと思う」

「そうか。奇遇だな。俺も何か温かいものを自分の財布から金を出さずに欲しいと思っていたところだ」

じつと、見上げる僕。じつと、見下ろす隼人。

結局首が痛くなつたので手に息を吐きかける僕。

寒いぞくそつ、と地球に文句を言う隼人。

くだらないやり取りをしつつ、僕たちは徒歩で駅まで歩いてきた。僕は今向かっている駅から一つ先の駅、隼人は今向かっている駅から三つほど先の駅に家がある。

ちなみに僕と隼人。知り合ったのは入学式である。

出席番号というものは、最近になって生まれた日付などではなく名前のあいとお順で決めるようになったらしい。僕の姓名は小島樹。隣のデカ男の姓名は小西隼人。同じクラスならば必然的に隣になるというもの。そんなわけで僕と隼人は入学式で必然的に隣になり、そのまま教室でも出席番号順に座席を作ったため必然的に前後の席となり、同じ帰宅部のため必然的に一緒に帰るようになり、これまた必然的に仲良くなつていった。

これで仲が悪かったのなら、それはよほど馬が合わない人間ということなのだろう。

「だからさ、当然そうだよな？」

「……は？」

「ぼーっとしていた僕にいきなり話しかけるな、隼人くん。」

突然のセリフに当然の反応として聞き返す僕。しかし、隼人はがくっ、と肩を下ろした。コントだったらきつとずっこけていると思う。

「……お前、聞いてなかっただろ」

「うん」

「清清しいくらいの返事をどうもありがとう。今俺の握りこぶしはそれはもう堅く硬く握り締められているんだが一体どうしたらいいと思う?」

「ブリッコの真似でもすればいいと思う」

「ふざけるな。というか少し想像してしまった俺にふざけるな。止める。なぜか酷く俺の尊厳が冒瀆されてしまった気がする」

「ごめん。いや、ごめん。僕も想像しちゃった。想像を絶する、とどうか想像だけど、いや、でもこれはキモイ。うん、ごめん。ちょっと近づかないで」

「おい。さすがに泣くぞ」

マジで涙目になっていた。仕方がないので離れるのは止めにしておく。

「はぁー。何で俺お前なんかと一緒にいるんだろ」

ため息交じりの吐息。こいつはため息が日常化していて大変だ。少し同情しないこともない。こいつの将来の頭のはげ具合に。

「中学のときの予想では今頃俺はウハウハだったのになぁ。同級生の内気な女の子から放課後体育館裏で愛の告白を受け、夕日が落ちる空の下、その全てを受け入れる俺。そして始まる俺の愛憎劇。それから可愛い彼女と屋上で弁当食べたり、一緒に放課後帰ったり、休日遊園地行ったりとかさぁ。そういう計画だったのになぁ」

「……まあ、男だったら一回は憧れることだけど。でも、色々ツッコミたいところがある。少なくとも僕は愛憎劇はしたくない。昼ドラは嫌だ」

「それなのに、連れているのはこいつ」

僕の発言を無視し、ちらりと僕を見下ろす隼人。そしてぺつ、と唾を吐き出しやがった。

僕の中でも現在進行形で文句とか憎悪とか殺意とか沸々と湧き出てきたのだが、もう何か全部面倒臭くなってきた。やっぱり適当に無視しておこう。というか、どれだけベタベタの妄想を抱えて生きているんだ、お前。

少し哀しい眼をしながら隼人を見るも、隼人は僕にお構いなしに話しを続ける。

「ま、これからだよな。今から冬休みだし。今日も街に繰り出すかな、お前も来いよ。お前、年上の女の人に受け良いし。『可愛いっ』とか言われてんじゃん」

「……………」

それは少なくとも男に対する褒め言葉ではない。

まあ、僕には当てはまらないこともないし、嬉しくないこともないのだけど。

「他にも笹川とか楠木とかも誘ってさ。どうせあいつらも今頃暇しているだろ。同じ寂しい冬を過ごす同士たちだしさ」

「……………いや、遠慮しとく」

ポケットに手をつ突っ込みながら答え、僕は足元を見る。薄汚れた白いスニーカーがアスファルトの大地を踏みしめて、冷えた足の指先は確かにその感触を感じていた。

「だけど、なぜか不安定。」

そのまま僕はぼーっと足先に顔を向けていた。だけど、上から降り注ぐ隼人の視線はいつまでも誤魔化せない。隼人は誤魔化せないように、露骨に、僕を見ていた。少し居たたまれない気持ちになりながらも、その視線を断固として拒否。

しばらくして隼人のほうが折れたのか、視線を前方へと送った。そしてまた、軽いため息をつく音がする。

「っーかさ。お前もいい加減慣れるよ。冬休み終わって、授業受けて、春休みに入って、もう二年だぞ。俺と同じクラスになれるわけ

でもないのに」

「……でも、嫌だ」

ぼそりと呟く僕の声は、しかしちゃんと隼人に届いたようで、「あっそ」と短い返事が返ってきた。

少し、寒い。

さっきまでのバカ騒ぎが懐かしいくらいに、今は静かだ。いや、本当は静かじゃない。車の走る音はすぐ横で聞こえるし、他におしやべりしながら下校する生徒たちもちらほらいるし、ざわめく通行人の足音だっけとすっかりと聞こえている。

でも、やっぱり静かだと思ってしまう。

ピンと張り詰めた冷たい空気が嫌で、僕は渋々と口を開いた。

「……面倒なんだよ。人と付き合うの。気を使うのとか、嫌われるんじゃないかとか、どうやったたら好かれるのかとか、そういうこと一々考えないといけないし。疲れるじゃん。そんな生き方」

「でもな、お前の生き方は寂しいぞ」

僕の方を一目も見ずに隼人はそう言う。

それは紛れもない正論で、反論の余地なんてないほどの断言でも、だけど、極論だ。

そんなことはもちろん僕だって理解しているし、わかっている。でも、やっぱり面倒臭い。あまり、人と関わりたくない。

浮かんだのは今日見た夢の中の場面。

僕を笑顔で見つめる黒く塗りつぶされた先生。小さな隣の女の子。一列に並ぶ園児。僕に向けられる視線。そして、『質問』。

『アナタノ好きナ色ハナンドス力？』

気持ち悪い。

吐き気がする。

白と黒のコントラストが織り成す道路を見つめつつ、僕は顔を顰めた。そして異常なまでの気分の悪さに堪えていると、突然、頭に重量感。ポンツと誰かの手が頭に置かれていた。

一瞬だけ、気分の悪さを忘れる。

その暖かさを感じて見上げてみれば、隼人が悪ガキとしか形容できない顔で僕を見下ろしている。

ニヤニヤと。

クソ野郎、と言いたくなる。

「あーあ、ダメだな。このお子ちゃまは。結局俺がいないと何もできないんだから」

そして僕の頭に置かれた手は、そのままグリグリと僕の頭を撫で回した。サラサラで綺麗で美しい自慢の僕の髪がクシャクシャに。ああ、止める。それ一体何時間かけてセットしたと思っている。汚い手で触るな。ちゃんとトイレから出て手を洗ったんだろっつな。

言いたいことは山盛りに特上、ライスも付けていい。そんな意味のわからないことを考えながら、とりあえずムカついたので靴を思いつきり踏みつけておいた。

足に感觸。

歪む隼人の顔。

短い悲鳴。

ざまーみる。

足を抑えながらギロリと殺人者のような形相で睨む隼人を無視して、僕はさっさと先に行く。バカに構っている暇はないのだ。外は寒いし、さっさと家へ帰りましょう。

でも、背後の隼人が優しげな顔に変わっているのには気付いていないから、とりあえず数歩先を行きながら、呟いておいた。

小さく、ありがとう、と。

そして更に小さく、さよなら、と。





#### 第四話 女の子な僕（前書き）

筆者の半陰陽に関する知識には不備があります。実際の半陰陽の方とは異なる場合もございますが、その辺りはご了承ください。

## 第四話 女の子な僕

「ただいま」

「あつ、おかえりなさい」

聞こえてくるのはいつも通りの母の声。

いつも通りの返事。

母はリビングでドラマの再放送なんてものを見ていた。

確か前にやっていたあたりきたりなラブコメディーとかで、ものすごくつまらなかったらしい。けれどそのつまらなさが有名になり視聴率は伸びたのだとか。よく知らないが、なぜそんなものが再放送になっているのだろうと少し疑問。まあ、どうでもいいけど。

靴を脱いで家上がる。リビングに入り、開けっ放しのドアを閉めると、寒かった外の空気はここには存在せず、暖房特有の暖かさどどこか息苦しさを感じさせる空気が充満していた。僕の体は急な温度変化に対応しきれず、クシャミを一つ。おっと失礼。鼻水がぶちーん、と騒がしく鼻をかみ、ティッシュはゴミ箱へ。家の構造上この部屋を通らずに二階の僕の部屋には行けないので、母の邪魔にならないように（もう手遅れな気もするが）リビングを通り抜け、ドアノブを掴む。

そしてドアを開けようとすると、その前に母がこちらにゆっくりと振り向いた。

「あつ、明後日病院だから忘れないでおきなさいね」

何でもないことのように母は言った。

年相応に綺麗な母は笑うでもなく、悲しむでもなく、怒るでもなく、ただ普通の表情。普通の瞬き。普通の形。そして僕が何か返事を返す前に母はすぐにテレビへと顔を向け、つまらないはずのドラマの再放送を見て笑う。笑う。笑う。

母の手は固く握りしめられていた。

だから、僕は何も言わなかった。

何も言わずに手元のドアを開け、一気に階段を駆け上り、音を立  
てずに廊下を歩き、また激しくドアを開け、ダッシュで自分の部屋  
へと入り、ベッドに勢いよくダイブ。

そしてようやく何かから解放されたように安心した。不思議と。

でも胸は空虚。寂しい。哀しい。面倒臭い。

……窮屈だ。

ため息を吐く。どうやら隼人の馬鹿癖が移ったらしい。まったく  
もっていい迷惑だ。慰謝料を請求したい。

「はあ。……解くか」

そして僕は苦しい胸の原因を一つ取り除くことを決意。

上着の厚い学ランを脱いで、ポイツとベッドに適当に放る。次に  
ワイシャツのボタンを一個一個丁寧に外し、また投げ捨てる。最後  
に白い無地のTシャツを足元に落とす。

上半身の服を全て脱いだ僕の皮膚は肌色のはず。しかし、今僕の  
上半身は白い。別に病気なわけじゃない。包帯が巻かれているのだ  
から当然なのだ。いや、これはサラシというのか。

きつく締められたサラシを解くためにベッドに寝転がりつつ学校  
のカバンを引き寄せ、その中の筆箱からハサミを取り出す。刃こぼ  
れし放題のそのハサミをサラシと胸の間に差し入れ、そしてチヨキ  
チヨキチヨキチヨキ。切り刻む。サラシは上から解かれていった。

抑えがなくなった。それなりに大きな僕の胸は跳ね上がる。男に  
はありえない脂肪の塊。胸に二つ。今日は少々きつく締めすぎたよ  
うで、跡が胸にくっつきりと残っていた。

苦しさが少し和らいだ。

ため息ではない吐息を一つ。体から空気が抜ける。

サラシをゴミ箱へと捨て僕は等身大の鏡の前に立ってみた。

そこに映っているのは紛れもない女の子。

肩までかかる黒髪に、眠そうな顔で立っている垂れ眼の女の子。男の制服を着ているとただの童顔のチビ男子高校生だが、上半身を剥き出しにすると女の子に見えてしまうから不思議。いや、元々女顔でもあつたし、不思議ではないはず。うん？この場合は女顔ではなく男顔であつたというほうが正しいのか。

・・・面倒臭いや。考えるのが。

とりあえずいつまでも裸でいるのは不謹慎。つつしみがなければいので箆笥へと足を運ぶ。前に親に怒られたのだ。弟には勘弁してくれと泣きつかれた。あまり性の意識がない僕には、よく分からない反面よく分かる。矛盾しているけど、そんなものだ。

箆笥から一番手前にある下着　パスカルピンクのブラジャーを取り出し、いつものように装着。ただこれを付けるのはあまり好きなものではないのだけど。また息苦しさが戻ってくる。少し顔を顰めつつもこれは仕方がないのだろう、と心の中で独り呟いた。

すると、控えめなノックが聞こえてきた。

「おーい、兄貴。ちよつと教えて欲しいところがあるんだけど」

「・・・ちよつと待て。」

下着が入っている箆笥を閉め、ズボンやティーシャツなどの一般服が入っている箆笥を開ける。すぐに下の制服も脱いで、また適当に服を選んだ。ちよつと洒落たダメージジーンズに、ロゴの入ったロングの黒い टीシャツ。部屋着だしこれでいいだろう。

服を着ると「いいよ」と返事を返した。

弟の小島大河は「おじやましまーす」と言いながら部屋に入ってくる。

部屋に入ってくるなりに弟はなぜか、うつ、と顔を顰めた。弟の癖に僕より高い身長で部屋を見回すと一言。

「って、何だよ、これっ！ちゃんと服は畳めって！」

「そのことか。別にいいじゃん。うるさいな」

「うるさいじゃなくて。脱いだら畳むのは常識でしょうが。・・・」

はあ、さすがは兄貴だわ。本当に純潔のO型だよな」

「血液型は関係ない。それにそんなこと言ったらお前こそA型臭いぞ」

「臭くない」

「臭い」

意味のわからない応酬をしつつ、僕は勉強机へと腰掛け、大河は僕の制服を片付け始めた。どうも弟はこつこついうぐちゃつとした空間が好きではないらしい。僕の部屋とは違って、本当に男の部屋かと聞きたくなるくらいに綺麗だし。まあ何にせよ、こつこつ毎日掃除してくれるのはごくろうなことだ。

大河は服を綺麗に折りたたみ全て片付け終わると、僕のところへやってきて、手に持っていた教科書を勉強机の上に置いた。数学の教科書。中学二年生の授業でやった懐かしい方程式。できれば二度と見たくなかったが、可愛い弟のためだ。仕方がない。

「で、どこがわからないの」

「ああ、えっと・・・ここ。因数分解を使うらしいんだけど、イマイチやり方がわかんない」

ちらつとその部分を見て見れば、何やら複雑な幾何学模様がはこびっている。これをどうやって因数分解で解くのだ、弟よ。

冷や汗を垂らしながら、それでも昔の記憶と今使っている記憶を総動員してなんとか問題を解き、説明してやる。問題を解くのに数十分を要し、解けたときにはほっと息を吐いたのは言うまでもない。最近の中学生は難しいことやってんだね。

ほんの二年前には同じことをやったはずなのだが。

説明を終え、「わかった?」と尋ねると、「わかった」と短い返事。

ようやく終わったと僕は肩を鳴らす。そして、まだ部屋を出る様子のない大河の方を見てみれば、なにやら立ち尽くしてもじもじと拳動不審な様子だった。

用がないのならさっさと勉強しろ、優等生。

「あ、あのさ。兄貴。えっと、ほら、あれだよ」

「何だよ」

意味のわからない弟は意味のわからないことを言う。その後詰ま  
ってしばらく呻いた後、「な、何でもない」と手を振った。

肩を落としてトボトボ歩いて部屋を出ようとする弟を見ながら、僕  
は首を傾げる。まあでもどうせくだらないことだろうけど。

分からないことを考えても仕方がないし、考えるのも面倒臭い。  
それならそんな無駄なことはせず、有効に時間を使うべきだろう。  
ということ、僕は勉強机に隠してある漫画の一冊を手に取る。

だが、その漫画を開く前に、もう部屋を出たと思っていた弟がそ  
れを遮った。

「兄貴……いや、姉貴」

と、呼びかけているのかも分からないくらいに小さな一言で。

けれど、僕はその小さな一言で動きを止めた。そしてぎこちなく  
弟の方へと体を向ける。弟は頬を掻いて僕の視線から眼を逸らして  
いた。弟の癖。何か重要なことを話すときはいつも頬を掻く。その  
癖。まだ直ってなかったらしい。

「なんていうか、その、言う言葉が見つからないけど、でも、さ」  
「ごくり、と大河は唾を飲み、躊躇って、言った。

「俺は姉貴の味方だかな」

一瞬の間。

僕は何を言えばわからずに、迷う。惑う。

急に胸が苦しくて、切なくなった。この胸を占めているものは、  
喜ぶのだろうか。悲しみなのだろうか。苦しみなのだろうか。よ  
く分からない。けど、きゅっつ、と胸が締め上げられる。不覚にも  
涙が出そうなのを堪えて、堪えて、何とか無表情に保ちつつ、僕は  
その弟の返事を茶化した。

「……くさいよ」

と。

その返事に弟はばかんと口を開けると、すぐに顔を真っ赤にして「じゃあもう知らない！」と叫び、部屋を出て行ってしまった。

ボタンと大きな音がする。

それに僕は部屋で一人苦笑い。出て来るかと思った涙も何とか引っ込んでくれたらしい。ここで泣いたら兄貴として示しが付かなかったから、助かった。ただ、少し大河には悪いことをしたけれど。

どうやら大河の用事は勉強じゃなくて、あの一言にあったみたい。兄弟思いの弟を持ったものだ。本当に、僕には勿体ないくらいに。

しばしの間、僕は大河が出て行ったドアをぼーっと眺めて、無為に時を過ごした。静かな部屋にはただ時計が時を刻む音しか聞こえない。そして、たぶん数分後くらいに、僕は手元に置いてある漫画を緩慢に開いた。特に、何かを思うわけでもなく。

その漫画の内容はくだらない恋愛模様が描かれている、やはりありきたりなもの。男の子が二人の女の子の間で揺れ動くとか、女の子の嫉妬とか優しさとか、そんなものが色々。けれど、これも再放送のドラマ同様になぜか人気を博しているらしい。まあ、僕もその噂を聞いて買ってしまったのだから評判についてどうのこうの言うことなどできないのだけど。

ただ、その漫画を読んでも内容なんて頭には入ってこなかった。別にそれが陳腐なものだからだとかそういうことではなくて、弟の言葉が頭から離れなかったというだけのこと。しきりに繰り返されるワンフレーズ。

『俺は姉貴の味方だからな』

じゃあ、それなら、僕は聞きたい。聞きたいと思う。大河に。一つだけ。

そう言うのなら、一体誰が、何が、僕の敵なのかと。

なんとなく面白くなって僕はそのありきたりな漫画を壁へと投げ

つけた。



#### 第四話 女の子な僕（後書き）

とりあえず物語りを転がすところまでは来たと思います。感想を下  
さるとより元気がでますので、どうかよろしくお願いします。

## 第五話 過去の僕と決められた日

仮性半陰陽。

それが僕の症状とか体質とか病気とか、そんなものらしい。

男でありながら女であり、女でありながら男である。僕の場合、遺伝子学的に女の子であったけれど、股間に余計なものが付いていたため間違われたらしい。それでも、見た目が女の子のような（これは半陰陽とは関係なかったらしいが）僕は、今まで男として生きてきた。

変わってしまったのは中学一年生の頃。くそ暑い日ざしの下、体育の時間に外でサッカーなんてものをやらされていたとき、それは起こった。

暑さと面倒臭さにやられた僕は、みんながはしゃぐグラウンドの隅の木陰で休んでいた。元々そんなに体が丈夫であったわけでもなかったし、その日は気温が三十五度もあったおかげで先生には仮病がばれずにすんだのだ。いや、本当に仮病であったわけでもない。その日は朝からお腹が痛かった。でも、ただ、それだけのこと。体育を休むほどのものでもなかったから、結局は仮病か、とそのときはそう思っていた。

確かにそう思っていた。

しかし、変化は何事においても突然だ。いや、それでもこの変化には予兆があった。あったのだけど、それに気付かなかった。だから僕にしてみればやはり突然であったし、その変貌は驚かすにはいられないものだった。

そのときに。木陰に座りながらぼーっと空を眺めているときに。僕は何気なく。何かを意図したわけでもなく。視線を足元へと落とした。ただ顔を上げるのが疲れたとかそんな理由で。

けれど、そこで僕は信じられないものを見た。目を見開き、呆然

となつてしまつていた。頭が真っ白になつて、しばらく呆けて、そしてようやく落ち着いた。ふりをした。とりあえず、辺りを窺い、木の陰に隠れる。そこで体操服のズボンを脱いで確認した。

滑らかに、淫猥に、紅い雫が僕の足を伝つていた。その液体は僕の意識をそこに向けさせるのに十分で、僕を恐怖させるのにも十分で、とにかく落ち着くと僕は自分に言い聞かせる。

先生がこちらを見ている様子はない。授業している生徒に檄を飛ばしていたりする。サッカーに夢中になつて生徒も僕に気付くはずがない。大丈夫なのだから、落ち着けと。

僕は常備しているティッシュを取り出して、綺麗にその赤い液体を拭う。地面に落とさないように綺麗に綺麗に、拭う。その後すぐにズボンを履き、何事もなかったかのように木から身を出した。ただ、額を垂れる汗と吐き気が次第に僕を襲い始め、顔を顰めるのを隠し切れない。暑さのせいだと自分に言い聞かせ、先生が生徒達から離れた機会を狙つて、僕は先生の下へと歩き出した。ゆつくりと「……すみません。具合が悪いので、保健室に行つていいですか？我慢できそうにないんです」

「うん？ああ、本当に悪そうだな。大丈夫か？すごい顔色しているぞ」

ははっ、と快活に笑つその先生に僕は笑顔を返せなかった。ただ、押し黙る。それに先生も顔を引き締まらせた。

「……つらそうだな？先生も付いていこうか。日射病を甘く見ていたらいけないぞ。人が死ぬこともあるんだからな。本当にダメなら早退も許可するが」

「一人で歩けるぐらいには大丈夫です。ただ、早退の方はお願いします。どうも今日はもちそうにないですから」

今日、他の授業を受けるなんてとてもではないが、無理だ。

先生は「わかった」と頷き、「後で担任に俺から言っておく」と言つて僕の肩を叩いた。何となく僻事を隠しているような気分になり、申し訳ない。いや、實際隠しているのだけだ。ただそのことは

あまり深く考えず、御礼を言っただけに僕は教室まで向かった。保健室に行く必要はないようなので、さっさと家へ帰ろう。

家へと帰って……どうしたらいい？

結局その後、僕は悩みに悩んだ末に両親に事実を告げた。何か悪い病気だと思つたと恐かつたのだ。もしかしたら死ぬんじゃないかも考えた。あと、もう一つのことも考えた。そのもう一つ現実を知っている僕は、そのことを考えずにはいられなかつた。両親もそれが気がかりだつたようですぐに病院に連れて行かされた。

静謐な空気を漂わせる病院の待合室で、僕はしきりに悩み、考え、苦悩という苦悩を味わい、そして面倒になつて考えるのを止めた。何か全てが面倒臭くなつた。

そして僕の名を呼ぶ声。

歩かされる長く静かで儼かな廊下。

開けられる白い部屋。

そこにいる医師と看護師。

診察。

そこで、僕は女となつた。

第六話 僕とチャラ男と病院（前書き）

少しコメディーっぽくなってしまったかもしれませんが、でも、コメディーではないので……。

## 第六話 僕とチャラ男と病院

退屈だ。本当に。

もう見慣れてしまった風景。

純白のベッドに淡いクリーム色のカーテン。窓から見えるのは芝生とベンチ。暖かな日差しがそこを何かの一場面のように照らしている。視線を部屋へと戻し横に振り向けば、脇に置いてあるのは僕の暇つぶし用の本の数々。主に漫画。他に面白いものなどなく、病院がつまらないと言う腰痛もちの町田さんや糖尿病の岡本さんの意見にも深く同意したい。

そう、ここは病院。

手術後。完全に女となった僕は一週間ほど入院することになった。本当のことを言えば、二、三日でいいはずなのだが、精神的な問題とかがあるらしい。カウセリングとか。

別に僕はそこまでショックは受けていないのに。

・・・あの日から三年も待つてもらったのだ。とっくに心の準備はできていたし、それにあまり実感が無いから悲観しようともできない。ただ股間の一物がどっかに消えうせただけだ。そう、それだけのこと。

しかし、両親に寂しげな悲しげな、そんな表情で説得されては僕とて我慢するしかない。

でもまあ、退屈なのは退屈で、読み飽きた本を漁るしかやることがないのは少し寂しい。

「退屈だねえ」

ぼそりと呟いてくる声は無視。

さて、これから何をしようかな。弟にいたずら電話でもするか。いや、病院で携帯は禁止だった。ここの看護師さんは厳しく優しくおっかないのだ。

「退屈だねえ。ね、樹ちゃん」

僕の横で囁くように息を吹きかけてくる男は無視。

うーん、どうしようかな。弟にエロ本を持ってくるように頼んだのに拒否されてしまったし。今日来たらもう一度だけ頼んでみるか。辞書のカバーで隠すなんて初歩的なことは止めたほうがいいよ、と一言言えばきつと弟も素直に。

「無視するってことは、それはもう俺の好きにしていよいよっていう意思表示なのかな？樹ちゃん」

「うるさい」

無視しようにも胸へと手を這わせてこられては無視できない。仕方がないので手元にあるシャーペン握って、その手が僕の胸を触る前にぐさつとその男の手を刺した。

男はちらりとその刺さったシャーペンに目をやり、僕へと視線を移して冷や汗を垂らし、もう一度その手を見たところで悲鳴を上げた。「ぎ、ぎやあああああああああああああああああああああああああああああああつ！」

「うるさい。耳元で騒がないでください」

ちよつとシャーペンに血が付いているのを見なかったことにして、僕はそのシャーペンを病人服の下へと隠す。いつもこの男撃退用に持ち歩いているのだ。血の匂いが日に日に強くなっているのはきつと気のせいではない。

「ぐ、ぐう。・・・な、なかなか強烈なスキンシップだ。さすがの俺もちよつと驚いてしまったよ」

「まだそう言い続けてくるのには驚きと共に敬意を表しますけどね。いい加減、僕に構うのは止めてもらえませんか、倉本さん。というより、勝手に病室を抜け出したりしたらダメでしょう」

そう言い、僕は倉本さんを見る。しかし、ふっ、と倉本さんは笑

うだけであつた。

「それは厳しいな。だって、暇だし。他に可愛い子いないんだもん。彼女にも振られちゃったしさあ。ね、樹ちゃん。こんな可哀相な俺を慰めてよ」

「まあ、入院中に四人も『彼女』が来たら振られますよね、普通。見事な修羅場でしたよ」

「あまり思い出さたくないことだけだね。あれのおかげで俺入院期間が延びる羽目になったし」

「倉本さん。自業自得という言葉を知っていますか？」

「あはははは。何それ？」

駄目だ。ここに駄目な人がいる。

僕の冷たい視線に気付いたのか、倉本は視線を逸らし口笛なんてものを吹き始めた。まったくいつの時代の人だろう。古臭いにもほどがある。

そんな目の前の男、倉本恭一。それがこの駄目人間の名前である。見た目はジャニーズに入っているような爽やかハンサム系な金髪の兄ちゃんのだが、中身はこの通りのロクデナシ。そして女たらしである。もう更正不可能なほどに。ちなみにここに入院しているのは骨折が原因とか。詳しいことは聞いていないが腕に包帯を巻いているし、嘘ではないだろう。

この人に出会ったのは三日前、であつたはず。確かそうだ。あの衝撃的な出会いは忘れられな・・・いや、嘘。忘れました。本当にそう、それなのにこの慣れ慣れしさは何だろうと疑問に思う今日の頃である。この人に出会ってからまだ三日しか経っていないというのに。あのときから・・・いや、出会いなんて思い出すのは止めておこう。ん？思い出すって何だ？覚えていないことを思い出すことなんてできないぞ。

「で、何の用です。僕、人と話しをするの、あまり好きじゃないんですけど」

「冷たいなあ。もしかして前のことまだ怒っている？ちょっと服を



ガバツと開いて確かめただけ……つて、痛い。あの、痛いです。太ももにグリグリとシャーペンを突き刺すのは止めてええええええつ」

「……人の必死の自己暗示を無駄にするな、ボケ」

確かに肉の感触をその手に感じながら、グリグリグリ。ああ、こんな凶暴な性格じゃなかったのにと嘆きながら、グリグリグリ。今日のゴハンは何だろうと考えながら、グリグリグリ。

そして、いい加減飽きてきたのでようやくシャーペンを太ももから離すと、そのシャーペンにはベツトリと赤い液体が。

またくだらないものを刺してしまった。

あと一応付け加えるなら、ひつくひつく、と泣く男などどこにも見えない。

まあ、思い出してしまったので簡潔に事実だけ述べることにしよう。

この倉本恭一という名の糞野郎は、暇の余り病院を冒険していた僕を見つけるとすぐにナンパし始め、僕が男だと言うとその僕の病人服をガバツと、ガバツと剥いだのだ。人前であるのに。そのとき幾人かこちらを凝視していた。まあ、一応下着は付けていたんだけど。

「だいたいさあ。服の上からでもしつかりと分かるくらいのポリウムなのに、男って嘘をつくのが悪いと思うんだよね、俺は」

ふと影を感じ振り向くと、倉本さんはもう回復していた。あ、でもまだ目尻に涙が溜まっている。

「……ん？でも、待つてください。ということは、女って知りながら服を剥いだってことですか？セクシャルハラスメント。刑法とか民法とかそういう話の問題ですよ？それ」

「あつ、リンゴあるよ。食べる？」

僕の母親が持ってきたリンゴを手にとって見事なまでに強引に話を逸らす倉本さん。

食べると聞きながら自分で齧り付かないでください。僕のリンゴ

を勝手に齧るな。

「……はあ」

「どうしたの？」

笑顔で聞いてくる倉本さんを無視し、僕は視線を窓の外へと送る。何だかもう疲れた。この人に構うのも面倒臭い。早くここから出て行って欲しい。

外の景色をぼーっと見ながら、それにも飽きて、まだ倉本さんの気配を感じている頃。

ちらりと倉本さんのほうを見てみた。そして今の素直な気持ちである「出て行けオーラ」を余すことなく送ってみる。しかし、倉本さんは気付いているのか、いないのか。完膚なきまでにそれを無視した。

本当に、何なのだろう。

「そんな嫌そうな顔しないでよ。ほら、前のことは謝るから。優ちやんだって暇でしょ？俺も同じで暇なのよ。俺と同じ年代の子って君しかないし」

苦笑いしながら言う倉本さん。

僕としても前のことはそこまで根にもつてもいないし、いや、意外に恨んではいるけど、まあ、そこは我慢しないこともなく。ちょうど暇を持て余してもいるのだが……だけど、それでも、別に話をしたいとは思わない。そもそも人と一緒にいるということが僕は好きではないのだ。面倒臭いし。

ただ、きつとこの人は自分が納得するまで居座るんだろうな、と嫌な確信を僕はまた感じていた。それに、微妙に寂しそうな顔をする倉本さんの垣間見てしまったては断るのもなんとなく気が引ける。人に嫌われるのも僕は好きではない。

仕方がなしに僕はOKの返事を返すことにした。

それでも一応、念のため、貞操のため、不機嫌そうな顔を崩さない。

「……別にいいですけど。僕はあまり話しませんよ」

「いいよ。俺が勝手に質問するから」

「……それも嫌だな。」

しかし、僕のそんな渋い顔にお構いなし。質問をしてくる倉本さん。どうやらかなりのマイペースな人らしい、この人。いや、わかっていたけどさ。

「えつと、じゃあ、さっき話しにも出たけど、歳の話。樹ちゃんって一体何歳なわけ？俺の見たところ、顔は十四歳。体は十分大人で通用するんだけど」

「すみません。やっぱなしで。僕もう寝ますんで」

布団に入り、横になる僕を倉本さんは慌てて抑えた。

「嘘！いや、ごめん。下ネタはもう使わないから！」

「……これでも一応十六歳です。十四歳じゃないですよ」

「えつ、マジ？じゃあ俺と同じ年じゃん」

「え？倉本さん、十六歳なんですか。随分老けていますね」

その言葉はどうやら致命傷だったらしい。

倉本さんはベッドへと崩れ落ちた。体を震わせ、その倒れた体を片腕だけで起き上がる。そんな大げさなと思いつつも、ちよつと禁句を言ったのではないかと不安になる僕。

「ふ、老けている？ち、違う。俺は大人びているんだ。ほらっ、一、二歳年上に見えたとかそんな感じだろ。ね、そうだよね」

ただならぬ雰囲気僕を掴む倉本さんに、僕はただ頷くことしかできなかった。正直少し、いや、かなり恐い。眼が血走っている。

「ああ、もういいや。うん、同い年ね。全然OK。歳上が好みだけど、同い年も嫌じゃないよ。えつと、じゃあ次。基本に返ろう、自己紹介。ということ、好きな食べ物とかは？」

『優チャンノ好きナ食べ物八何デス力？』

蘇った。一瞬だけ。だけど、別に、僕は、何も、思わない。

「……ない」

「え？ないの。……ふーん、じゃあさ、好きな歌手は？」

「いない」

「好きなサッカーチームは」

「いない」

「好きな俳優は」

「いない」

「憧れる人とか」

「いない」

「今まで好きになった人とか」

「いない」

「今好きな人とか」

「いない」

「付き合っている人とか」

「いない」

降りかかる沈黙。

嫌だった。本当に、酷く。やっぱり、人と話すのは好きじゃない。

それでも、これで呆れていなくなってくれるだろうと、倉本さん

いや、同じ年と発覚したのもう「さん」は付けなくていいか。

倉本の方を見ると、奴はなぜかガッツポーズをとっていた。

マジで意味がわからない。

「ふふふふ。ということとは、樹ちゃんは今フリーということですか。

なんだあ、焦ることないない。ゆっくり愛が育めるってことか」

手馴れた様子で肩を回してくる倉本。だけど僕はそんなことより、

この人の反応の方が不思議であった。じつと倉本を見つめる。

今まで僕がこういう返事を返すたび、人は皆沈黙したのに。人は皆困惑したのに。人は皆僕を避けたのに。変な奴だとか、つまらな

いとか、おかしいとか、陰でどうとか言っつて。それは奇妙なものを  
見るといふより、嘲笑で。だけど、きつとそれも『当然』のことな  
んだらうと、僕は思っていた。

何かを好きになることができない僕は、何かに執着できない僕は、  
誰かと楽しく話しをできない僕は、それゆえいつも独りだったから。  
僕は僕の世界で、体も心も異分子だったから。それを寂しく思うこ  
ともあつたけど、人の顔色を窺いながら言葉を紡ぐのも億劫で、面  
倒だったから。だから、僕はいつも独りなんだと、独りになるしか  
ないのだと、信じていた。たった一人の例外を除いて。

そして、見つけた。もう一人の例外。

眼を丸くして倉本を見る僕は、「あれっ？抵抗しないの？」とい  
う倉本の声で覚醒。気付いてみれば、倉本の折れていない、肩に回  
したほうの手が、結構僕のきわどいところまで来ている。慌てて倉  
本を振り払いつつ、僕はそれでも倉本をじつと見た。

「・・・おかしいとか、思わないの？つまらない奴だとか、思わ  
ないの？」

「うん？」

「好きなものがないって、おかしいことじゃないの？」

「いや、そんなことないでしょ。別に」

まるでそれが本当にくだらないものであるように　いや、もし  
かしたら本当にくだらないことだったのかもしれないけど　倉本  
はあっさりそう言った。僕が一生懸命、悩んで苦しんで、結局諦め  
てしまったことを。それはもう馬鹿馬鹿しいくらいストレートに。  
呆気なく否定した。まるで取るに足らないことのように。子供みた  
いな幼稚な悩みなんだよと言われてるみたいに。

それは嬉しくもあつたけど、同時にやっぱリムカついた。

とりあえず愛用のシャーペンを取り出す。が、突き刺す前に体を  
仰け反り素早く回避された。

「・・・ちっ」

「あ、あのさ。それって凶器だと思うんだよね。簡単に突き刺してはいけないものなんだよ」

「知っている」

「知っているって……」

あははは、とどこか諦めた表情で笑う倉本。

それに僕もくすつと笑みを零した。

と、倉本が凍りつく。

カチン、みたいな効果音が鳴ったような気がする。僕を凝視してピタリとも動かない。一体どうしたんだろうかとその顔を下から覗いてみると、突然、いきなり、大きな腕で抱きしめられた。って、おい。

「うわあ、やべっ。見ちゃいけないもの見ちゃった。うわー、うわー。すげえ。レアだ。もう一度笑ってよ。ほらっ、いー、いー」

抱きしめという名の圧迫から解放された僕は、今度はホツペを指で引き伸ばされた。「いー」と言いながらぐいぐいとホツペを引っ張られる。というか、痛い。口からその音を出すと「いひゃい」になっていた。

再び僕の頭に怒りマークが浮き上がる。

とりあえず絶妙な腰の回転と膝のバネを使いつつ、アッパーを繰り出しておく。それは見事に決まり、倉本にガチンという顎の音を鳴らさせながら、倉本をふっ飛ばさせた。

スローモーションで倒れていく倉本。

地面に熱いキスをしながら更に一回転。

そしてそこには一体の屍ができあがる。

しばらく続く沈黙の中でその屍はポツリと呟いた。

「……俺、怪我人なのに」

そんな声はもちろん聞かないふり。

僕は倉本に見えないように、また笑みを零した。

第六話 僕とチャラ男と病院（後書き）

できれば感想をいただけると嬉しいです。それが活力となりますので。

## 第七話 僕の胸に残るもの

もう、勘弁して。

「おーい、樹ちゃん。こっち向いてええ！おーい、おーい。無視したって無駄だぞおお。俺は叫び続けるぞおお」

「……………」

「……………」

「……………あつ、退院おめでとうございます」

思い出したようにお決まりの文句を言う看護師さん。

その笑顔が微妙に引き攣ってしまっているのは仕方がないだろう。この場にいる先生方や、僕と母親の表情もかなり微妙なもんだ。いや、違った。母親はなぜかニヤニヤと僕を見ている。その笑顔の意味など考えたくもないのもちろん無視。

その後、儀礼どおりに挨拶を交わし、お辞儀する先生方。

「それじゃあ、お大事に」

「悩みごとがあったら我慢せずに、いつでも連絡してくれ」

「はい。本当にありがとうございます」

「ありがとうございます」

それに応対して僕と母もぺこりとお辞儀する。

「連絡してねっ！携帯にアドレスと電話番号が入っているからねっ！毎日君のあらぬ姿を想像して待っているよおおおおおお」

「……………」

とりあえず二階の窓から騒ぐ馬鹿をどうにかしてくださいと初めて僕は神に祈る。しかし、その願いは無情にも叶えられることはなかった。ああ、もう本当に面倒臭い。

自分の顔が赤くなっていると自覚できる。顔が熱い。それを必死で抑えて僕はその場を離脱することを決意した。体の向きを変え、



駐車場へと足を運び、母の乗ってきた車へと急ぐ。母はまた先生方にお礼を言いうと僕の後についてきた。どうでもいいが、その含み笑いを僕に向けないで欲しい。

「へえー。ふーん。ほおー」

「・・・何？」

ギロツと母を睨むも、母は何所吹く風のご様子。早足で歩く僕に負けない速度で僕の後を追ってくる。

「うーん。うちの樹はこれから女の子として生きていくのだけど、大丈夫かしら・・・と、悩んでいた私が馬鹿馬鹿しくなっちゃったわね。どうもこりや失礼しました。カツコイイ男の子だったじゃない。まあ、少し馬鹿っぽいけど」

「馬鹿っぽいじゃなくて、馬鹿。それに別に恭一は関係ないよ」

「恭一君っていうんだ、あの男の子。でも、下の名前で呼ぶなんてもう、いつの間にそこまで仲良くなったの？」

「・・・それは、あいつが下の名前で呼べつてうるさいから」

一日中、念仏のように唱えてきやがったのだ。危うくノイローゼになってしまつたところだった。病院に入って病気になるなど洒落にもならない。

「ま、いいけどね。あつ、車ここよ」

母が指差す方向に確かに車はあつた。見慣れた渋い緑色のレガシィ。結構な中古であるが、母の話ではまだまだ頑張ってくれないと困るらしい。もう十分なほどに働かされたと思うのだが、まだ酷使され続けられるのかと思うと少し不憫だ。いや、使われているのだから本望なのかな。

そんな不毛なことを考えながら僕はそのレガシィの後部座席へと乗り込む。母もすぐに運転座席へと乗り込んだ。

「でもね、安心したっていうのは本当よ。ああいうお友達は大切にしないね」

そして母は、サングラスを装着しながらそんなことを言う。

「わかっている」

渋面になりながらも、僕はそう返事した。

ふふつ。と笑う母は何だか実際の歳よりも若く見える。それにまた僕は何となく気恥ずかしさを感じて母から顔を逸らした。

そして聞こえるエンジン音。

揺れ動く中で、見慣れた病院は遠ざかっていく。もうあの馬鹿の声は聞こえなかったけど、なぜかあまり嬉しくない。あいつが騒がしかった分、余計なことを考えないでくれたのも確かだし、数少ない友達だと思えたのも確かだから。別に、他にそれで何かを思うわけでもないけれど。

ズボンから携帯を取り出す。使い慣れてない携帯の電話帳を見れば、そこにはしっかりと『倉本恭一』の名前があった。なぜか見覚えがない、『ボーイフレンド』のグループ名の中に。

とりあえず『倉本恭一』を『友達』のグループ名に移動させてから僕は携帯を仕舞った。まあ、電話がかかってきたなら応対しないこともない。

手術から一週間。

僕にしてみればもう一ヶ月くらい経った気がするのだが、まだ一週間。クリスマスもお正月も病院で過ごすことになったが、冬休みはまだ終わっていない。一日くらいは暇になることもあるだろう。

## 第八話 後回しの代償

女の子として訪れる、初めての我が家。

男の子として居た僕とは、別個の空気を纏っている我が家。

家が変わったわけではなく、僕が変わったわけでもない。男の子から女の子に変わった僕は、それでも本質は変わっていないはずだから。だからきつと、変わってしまったのは周りだろう。

それが悲しいのかどうか。それすら、僕にはわからない。

僕は、何かが壊れているのかな。

家での対応など考えるのも面倒なことだったので、僕は何も考えなかった。

時間はあつた。病院に居たとき。病院から家までの道程。だけど、僕は何も考えなかった。それは後回しにすれば良いという問題でもないのに。

「考えない」という現実逃避が、その問題自体を逃がしてくれるというわけではないのに。

因果応報。自業自得。僕の怠惰が元いた場所を変えさせた。

つまりは何が言いたいかというと、家に着けばそれはそれで面倒なことが多かった、ということ。

まずは、弟と父の反応。

初め、彼らは曖昧な笑顔で僕を迎えた。ぎくしゃく、なんて言葉が似合っていたと思う。いつも通りの対応をしようと無理する彼らが少し、おかしかった。

僕に何と云えばいいのか、どういう態度で接すればいいのか。か。

そういうことがまったくさっぱりわからないようで、まじついで

いて。

でもそれは当然の反応で、戸惑うのも無理はなく、それを彼らに責めるのは間違っている。

どうすればいいのか、わからない。僕にはわからなかった。僕は父や弟と今まで通りに接していきたくと思うけど、彼らがそれを望めないのなら、仕方がない。諦めるしかない。それなら僕が変わらなくいけないだろう。今まで通りは無理でも今までに近い居場所を作るために。

それでも、時間が解決するのではないかと期待してしまうのは、駄目なことなんだろうか？

わかつてはいるけれど。それが、だけど、土台無理な話だつてこと。

弟はまだともかくも、父は僕が生まれてからずっと僕のことを息子として扱ってきたのだから、それがいきなり（もちろん三年前から知ってはいたが）娘になれば、一体どう思うのか。僕には想像すらできない。

母は受け入れてくれたけど、父は元々あまり話すことがなかったし、たまに夕飯が一緒になるときにぼそぼそと近況を報告し合うだけだったから。だから、別に父が嫌いなわけでもないけど、少し恐かった。僕がどう思われるかが恐い。うまくこれから付き合っているかどうか、恐い。

・・・面倒臭いので、そういうことはなるべく考えないようにしているけど。

長くなったけど、それが理由の一つ。そして、二つ目は日常の服。男物の服はだいたい捨てられてしまった。

残っているのはジーンズ系と女の子が着てもおかしくないような टीーシャツ類。僕はあまり服に頓着するような人間ではないので特に思うところはないが、それでも箆笥の中にスカートが入れられているのにはまいってしまった。おまけに母の趣味のフリフリのワ

ンピースなどが入れられていたにも……。  
履く機会のないものなので、きつと永遠に筆笥の奥底に封印されることだろう。

最後に、制服。

僕が前に通っていた学校の制服はすでにない。男物だし、なににより、もう通うことのない学校の物だから。

母と相談して決めたことだった。『相談』という言葉を使うのはどこか間違っているような気がするけれど。僕は全部が全部面倒で、適当に話を聞いて、適当に承諾してただけだから。

母が言っていたことは、僕は転校したほうがいいらしい、ということ。友達が戸惑うし、何よりいじめられるのではないのか、とそういうこと。母も母で不安なのだ。

『友達』という言葉で思い浮かんだのは一人。いや、今は二人。忘れていた。でも、前からの友人であるその顔を思い出すと、胸がズキリと痛む。

きつと、怒るだろう。きつと、僕を嫌うだろう。きつと、何も言わずに転校してしまう僕のことを罵るだろう。それでもいい。それでもいいけど、忘れないでほしいと思う。どんな思い出でも、どんな思い出でもいいから、忘れないでいてほしいと思う。

これも、僕の我侭なんだろうか。

自室の椅子に凭れ掛かりながら、僕は憂鬱に外を眺めていた。外は快晴とは言いがたく、しかし、雨が降っているような悪天でもない。ただ、どんよりと厚い雲に空が覆われていた。

晴れでもなく、雨でもなく、曇り。灰色の空。

それが更に僕の心を憂鬱にさせる。確か本か何かで人の心と天気は密接に関係していると読んだことがある。この僕の気分の悪さもこの天気の子のせいなのだろうか。責任を追及したいところである。

そんな馬鹿なことを考えて、また憂鬱になった。

「……何だか、部屋にいるのは悪循環な気がする。」

男であったときと今女であることの違いを、この家にいると思いが知らされる。それを僕が嫌だと思っっているのかどうなのか。壊れた僕はイマイチわからないが、何となくそれが僕を憂鬱にさせているのではないかと思う。多分、きっと、そうだろう。

ゆったりと、緩慢に、亀のように、僕は椅子から立ち上がる。

床に放ってあった黒色のコートを掴んで、僕はそれを羽織った。

そして部屋を出ようとすると、不意に部屋にある等身大の鏡が目に入る。

どこからどうみてもその鏡に映っていたのは女の子で、男の子に見えるはずもない。

不思議だ、と僕は思った。

確かに僕は男の子で、男の子でいたはずで、それが今は女の子だ。サラシを巻いていないせいか、股間の一物が消えうせたせいか、髪が肩まで伸びたせいか。本当に突然僕は女の子になってしまったと思う。いや、前にも上半身裸でいたときは、女の子に見えたから突然ではないのかもしれない。それでも、やっぱり不思議だ。

何かがおかしくて奇妙で、だけど僕は笑うことなく部屋を出た。

玄関までたどり着き、靴を履く。それに少してこずっている、後ろからリビングのドアが開く音がした。それに気付きながらも僕は振り向くことなく、靴を押さえて、トントン、と打ちそろえる。

後ろに人影がいたけれど、人影は何も喋らない。僕が靴を履き終え、玄関の扉に手を掴んだところで人影は遂にその口を開けた。

「……どこか、出かけるのか」

低く、しゃげれた、男の人の声。

父の声だった。

「……うん」

と、僕は短く答える。振り向くことはしない。

「外は寒いぞ。大丈夫か」

「コートを着たから」

「どこに行く？」

「多分、街の方」

「……気をつけなさい」

「……うん」

結局、振り向くことなく僕は家を出た。

扉を開けたところで冷たい風が僕を襲う。それに身をすくめながらも、僕は歩き出した。歩きながら息を吐いてみると、その息は白く染まる。実に一月らしいきつく寒い空気だ。

ただ、それが今の僕にはつらく堪えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4547b/>

---

臆病な僕

2010年10月9日01時26分発行